

こんなときこそ言葉を大切に

中島 弘之（電子情報工学科）



『微分方程式序説』 岡村 博著 共立出版 2003年12月

この本は1948年に42歳で亡くなった数学者・岡村博の遺作です。内容は常微分方程式の解の一意性に関するもので、初期値に対して解が一意的であるための必要十分条件が本の最後に与えられています。その条件は、のちに「岡村関数」と呼ばれることとなる関数によって表現されており、常微分方程式の解の安定性を保証するためのLyapunov関数と岡村関数とは等価であることが判明しているようです。

さて、この紹介文をここまで読まれた方の大半は、数学や微分方程式にはそれほど関心がなく、先を読み進む意欲を既に失くされたかも知れません。しかし、ここで紹介したいのは数学的な議論ではなく、本の最後に載録された「数学者 岡村先生」という文章です。これは、岡村博の弟子である山口昌哉氏が恩師の思い出を書きとめたもので、その内容は「自然科学者こそ言葉を大切に」と要約できます。

岡村先生の思い出は、市内電車の停留所で偶然に交わした会話の場面から始まり、書物を貸すといった学生との些細な約束も大切にただけでなく、その履行を楽しみにしていたという人柄の紹介へと続いています。このように論理と言葉を大切にする岡村先生の人物像を表わす出来事として、微積分学の講義でのエピソードが次に語られます。

「積分の第二平均値定理」の新しい証明を考えた岡村先生は、ある日の講義でそれを話し始めましたが、途中で不十分な点が見つかり、思案を重ねても、その時間中に証明は完結しませんでした。次の講義でも、その次の講義でも新たな難点が現われ、完成しなかった。3回目の講義のあと、同級生と二人で先生の部屋までついて行った山口氏は、研究室の黒板の前でさまざまな試みを繰り返した末に漸く先生が証明を完成させるのを目の当たりにして、「数学が作られる」のを初めて目撃したと、その感動を語っています。

現在の授業評価アンケートなら「教員は授業の準備を十分にしていましたか」という項目で最低点がつく講義かも知れません。しかし、不十分な点をごまかさず、ゆるぎのない論理を積み重ねて真理に到達する過程をLIVEで学生に見せる授業には、安易な基準では衡量できない教育的価値があることは間違いのないでしょう。岡村博が論理と言葉をこのように大切にしたのは次のような「主張」に基づくのではないかと山口氏の解釈が文章の半ばに記されています。

「論理や言葉を通して、人と人が理解しあえるのは本当に不思議なことだ。それはこの世のこととも思われないぐらい不思議な有難い(文字通りほとんど有り得ない)ことが現実に行っている、と考えなければいけない。したがって、人間の努力によって、論理や言葉を大切にして、ちょっとでもそのねうちを下げないようにしなければならない。したがって自分は言葉をごまかしたり、理屈をごまかしたりしないで使ってゆくのだ。」

ここ2年以上のあいだ、遠隔での授業や会合が多くなり、対面でのコミュニケーションの機会が減少しました。大変な不幸であったわけですが、そのような制約の中でも、論理をごまかさず、言葉を大切に扱うという姿勢があれば、電子的な媒体を通してであっても人と人とは十分に理解しあえたのではないのでしょうか。また、数学に限らず、自然科学にも限らず、学問に携わる者は総て論理をゆるがせにしないよう心がけ、発見したことや考察したことや実験で得られた結果を適切な言葉で伝える努力をしなければなりません。そのようなコミュニケーション能力を鍛える機会であると現状をとらえていた者が、ポストコロナであれウイズコロナであれ、これからの時代を生きてゆけるのかも知れません。